

水村美苗『私小説 from left to right』考
—<私小説>による人種観への異議申し立て—

但馬みほ

キーワード： 言語 人種 主体構築 私小説 ジェンダー

要旨： 水村美苗『私小説 from left to right』における主人公美苗の日本語の書き言葉偏愛は、美苗の抱く人種的劣等感と表裏をなしている。水村はアメリカで認識せざるを得なかった人種の問題を、単なる個人的問題に収斂せず、作家の卑近な日常を語る<私小説>というジャンルを用いて、日本人全体にかかわる問題として提示した。美苗の日常と内面を<私小説>の世界でリアルに再現するのに必然的に要請されたスタイルが複数言語の混交文体だったと考えられる。

Abstract: Mizumura Minae's *Shishosetsu from left to right* presents race and language as an inextricably linked problem. In this near-autobiographical novel, the protagonist, Minae, holds a strong sense of inferiority toward white Americans, which is thought to be the other side of the same coin of her internalized white worship. Minae demonstrates an ambivalent colonial disposition in that she feels racial oppression toward whites while refuses to identify herself with the people of color. Minae's obsession toward Japanese literature can be understood as her way to make up for her injured pride as well as her desperate attempt to construct her agency as a Japanese woman living in the United States. No matter how fluent she becomes in English, Minae holds an almost paranoid belief that she is not legitimately recognized as an authentic speaker of English because of her color. Minae hides herself behind the Japanese text in an attempt to liberate herself from the imposed racial hierarchy. Writing a so-called "I-novel (shishosetsu or watakushishosetsu)" in Japanese, Mizumura successfully expands the protagonist's personal predicaments to an on-going problem that the Japanese have neglected to face since their encounter to the Western imperial powers in the late nineteenth century. In this short essay, I will argue that the multi-lingual style that Mizumura has adopted to create *Shishosetsu from left to right* is imperative for the I-novel tradition, which vividly represents the protagonist's internal conflicts.

はじめに

水村美苗の『私小説 from left to right』（以下『私小説』と略記する）におけ

る主人公美苗¹の日本語の書き言葉偏愛は、美苗の抱く人種的劣等感と表裏をなしている。最終的に美苗は移住先のアメリカから生まれ故郷の日本に戻り、日本語で小説を書くことを決意する。作品創出に<私小説>というジャンルを用い、美苗自身が抱える人種に対するアンビヴァレントな思いを、単に個人の問題に収斂することなく、近代以降日本人が隠蔽しつつけてきた鬱屈した人種観として提示することに成功するのである。以下に『私小説』に表出される言語と人種の密接な関係について、ジェンダーの視点を交えて論じたい。

先行研究では『私小説』の複数言語混交文体に注目し、その意味と効果について論及するものが多い。本稿もそれらの研究に依拠しながらも、さらに一歩進めて、物質としての『私小説』のテキストを<視覚>と関連づけて分析したい。美苗は白人から視覚によって判断されることに強迫観念を抱いているのであるが、同時に日本語の<文字>という視覚表象に救いを求めている。美苗が心のよりどころとする日本語の書き言葉と、美苗の姉との会話に代表される日本語の話し言葉がもたらす複層的なマテリアル・リアリティを基に、美苗がいかようにしてエージェンシーを構築していくのか、その過程を検証したい。

1. 人種の問題

『私小説』の中心テーマに、美苗が抱く「白人」に対する劣等感と、美苗自身に内面化された「白人」崇拝がある。作品全編にわたってアメリカの豊かさと日本の貧弱さが強調され、前者は光にみちあふれ、後者は黒い影として描かれる。『私小説』に挿入されたモノクロ写真の数々は、アメリカ東部の整然とした街並みを現出する。石造りの堅ろうな建物が下からあおるように写され、その高さが強調されている。手入れのゆきとどいた街路樹の葉影からさんさんと降りそそぐ日の光がまばゆい。数えきれない本を収蔵した図書館、屹立する塔を持つ荘厳な大学キャンパスなどの写真の中に、突如として、雑然とした中華街の土産物屋と八百屋の写真二葉が挿入され、混沌とした異質さが際立つ。

アメリカ生活でつねに立ち位置の確認を余儀なくされる美苗は、「白人」に対しては劣等感を抱きながらも、アジア人や黒人に対しては同一視されたくないというアンビヴァレントでコロニアルな心性を有している。ここで注意しておきたいのは、美苗が強い抵抗感を抱いている「白人」とは特定の人物を指すのではなく、「白人」という<想像の共同体>が「白人」以外の上位に立つものと既定する近代イデオロギーの総体を示すことである。美苗は、高校の黒人教師から同じ「有色人種」として括られることに反発を感じる。また中国・韓国出

¹ 主人公・語り手の美苗と作者水村美苗を混同しないために、以降は主人公・語り手は美苗、作者は水村と表記する。

身者に対しては、外観では日本人と区別がつかない「峻厳たる事実」²に許しがたい気持ちさえ抱く³。その根源には、美苗が知らずに内面化した「白人」崇拜の気持ちと、人為的な人種イデオロギーでカテゴリー化されることへの怒りがある。

自分が東洋人であるのを知る驚きとは、それは西洋人から、あなたは向こう側の人間です、と私から見ても向こう側の人間と一緒にたにされてしまう驚きであった。しかも、私自身彼らではないことを幸せの一つとひそかに数えている人間と一緒にたにされてしまうことに対する驚き—そして屈辱であった。⁴

日本人が他人から見て中国人や韓国人と見分けがつかぬというのは、眼で見て納得できることがらであった。だが日本人が黒人と同じように“colored”だというのは、女と月が同じように陰の世界に属するといった類の、観念の世界のことがらであり、物理的世界からそのまま推論できることではない。それは近代に入ってから西洋人が西洋言語の主体である自分たちを **white** とし、彼らにとって異質に見える人間をすべて **colored** と呼ぶことによって機能するようになった概念でしかなかった。⁵

美苗は人種的劣等感の埋め合わせと日本人女性としての主体性の確保のために、日本語の書き言葉に精神のよりどころを置くようになる。日本語の書き言葉がどのように美苗の自尊心の補てんとエージェンシーの構築に作用するのか。まずは美苗の劣等感の克服がなぜ英語の語学力向上という方途には向かわずに、日本語の書き言葉に向かうのかという点について考えてみたい。

2. なぜ英語ではないのか

美苗のエージェンシーは話し言葉、書き言葉にかかわらず英語では構築できない。英語を話さざるを得ない状況をなんとか回避しようとするのも、英語の発話能力で知能をはかられる屈辱から逃れるためである。

美苗は英語の発話能力に劣等感を抱いている。十二歳まで日本で育った美苗

² 水村 187 頁

³ 同上

⁴ 同 215 頁

⁵ 同 187 頁

は、アメリカ移住時にはすでに中学生であるのに、英語がほとんど話せないせいでボール遊びをするような子どもにしか相手にしてもらえない。中学校では英語能力に応じて「うすのろ教室 (dumb class)」⁶に入れられ、皆から仲間はずれにされている劣等生の友人しかできない。「言語を操る能力で過酷に階層化される」⁷アメリカ社会において、美苗は「低能」の烙印を押されたと感じ、周囲から「存在しないがごとくに無視されるのに慣れていくうちに、無視されてそれがあたり前だとしか思えない、まことに格の低い人格となり果て」⁸るのである。渡米前はお嬢様育ちだったために、渡米後の自我の落差と蒙った屈辱の大きさは計り知れない。そのため英語に対するコンプレックスは英語能力が向上した後も尾を引き、高校卒業後は「英語から逃れる為だけに」⁹美術学校への進学を決め、絵画を専攻する。また学生寮に入れば必然的に寮生と英語で話さなければならないので、不本意ながら姉の奈苗とアパートをシェアすることを選ぶのである¹⁰。アメリカ移住から二十年、「まるで英語から逃れるためだけに生きてきてしまった」¹¹美苗なのである。

ではなぜ美苗は英語の発話能力を向上させる努力をしなかったのか。両親がのんびりしていたせいで、是が非でも英語を上達させなければという危機感が薄かったことが理由のひとつとして挙げられている¹²。また、「それでは、と発憤し、のんきな親を尻目に英語をものにしようという気などは薬にしたいほどもおきなかった」¹³という美苗自身の気の持ちようもあった。アメリカ生活は永遠に続くものではなく、いずれは日本に帰って日本人と結婚するのだから、という気持ちを家族全員が共有していたことは否めない。美苗は「英語のなかに生きる自分がみじめなほど、誇りだけは空を高く駆け、今の自分の姿は仮の姿でしかないという信念を深めるだけ」¹⁴で、日本に帰り日本語の世界に戻りさえすれば、本来あるべき自分の人生を生き始めることができるのだと固く信じこむのである。

加えて、英語が上達してもアメリカ社会には同化できない「隔たり」があることを美苗は感じている。美苗の分身ともいえる二つ年上の姉奈苗が、美苗とは対照的に「べらんめえ」英語を乱用するのは、強い女を演じ、アメリカにな

6 同 288 頁

7 同 164 頁

8 同 165 頁

9 同 137 頁

10 同 113 頁

11 同 299 頁

12 同 164 頁

13 同 165 頁

14 同上

んとか適応しようとするための戦略といえるだろう¹⁵。しかし美苗には、奈苗の努力が報われるようには思えない。なぜなら「英語がいくら流暢になったところで、この隔たりが埋めつくされようとはとても思えなかった」¹⁶からである。美苗の感じる「隔たり」とは人種の問題にほかならない。美苗は「べらんめえ」英語を乱発し奮闘する奈苗に「もう充分には若くないひとりの東洋人の女」¹⁷の「世の中から切り離されたような寒々しい印象」¹⁸を感じとり、うら悲しい気持ちに襲われる。奈苗の纏う「寥々とした空気」¹⁹は、「アメリカ生まれの東洋人の漂わす空気」²⁰とは異質のものだ。それは「根を下ろすことも人々と手をつなぐこともできない異邦人の空気」²¹なのだと言美苗は悟り、胸を突かれるのである²²。同じアジア系でありながらも「アメリカ生まれの東洋人」と美苗たち姉妹を分け、美苗に「隔たり」を感じさせるのは、近代以降日本人に受け継がれてきた「選択された無知 (selective ignorance)」²³の作用であるのだが、このことに関しては後述する。

いくら英語が堪能であってもそれを「正統的に継承することができない」²⁴という美苗の屈折した思いは、自分がアメリカ社会に同化できない東洋人であることに起因する。溝渕園子は『私小説』の主題が「言語の問題が人種や主体形成の問題へと還元されていく」²⁵ことにあると喝破する。話し言葉は必然的に話

15 奈苗の話す英語が「下品」で「言語的保守派の読者が眉をひそめるであろうような形式・文体上の特徴のかずかず」だと指摘する研究があるが、これはどうであろうか（吉原真里「Home Is Where the Tongue Is:—リービ英雄と水村美苗の越境と言語—」『アメリカ研究』34 (2000): 102)。たしかに美苗は奈苗の英語を評して「べらんめえ」調だと語るが（水村 21 頁）、姉妹の会話が上品である必要はないし、普通のアメリカの若者が親しい人と話す程度の口調であり、ことさら眉をひそめるような内容ではないように思える。

16 水村 98 頁

17 同 224 頁

18 同上

19 同上

20 同上

21 同上

22 *Bone* の主人公・語り手レイラとの違いがここに現れている。青柳悦子は『私小説』の美苗を評して「<移植型>境界児」であると規定する。美苗はアメリカ社会において境界に位置する人であるが、日本からの<移植>者でありアメリカ生まれではない。*Bone* のレイラは青柳の定義するところの「出生型境界児」にあてはまるだろう。青柳によると「出生型」は「不安定な複数性のあり方は集団的運命として周囲の人々と共有されているのにたいして、「移植型」の場合には、この運命はまったく個人的な条件として背負われることになる」（22 頁）とする。青柳の分類に依拠するならば、美苗は移植型、レイラは出生型の好例といえよう。青柳悦子「複数性と文学—移植型<境界児>リービ英雄と水村美苗に見る文学の渴望」『言語文化論集』56 (2001): 1-29。

23 水村 278 頁

24 同 310 頁

25 溝渕園子「水村美苗『私小説 from left to right』試論：異言語混交文の必然性をめぐって」

者が可視化される。美苗は書き言葉のかげに隠れることによって「白人」に強要された人種のカテゴリーから解放されようとするのである。

3. 話し言葉と人種

話し言葉と人種の密接な関係は『私小説』の中心を占める問題である。美苗が通う高校に勤務する二人の黒人教師のうち、どの生徒からも尊敬される博士号保持者の化学教師 Mr. Jenkins は、「貴族的な外貌」²⁶を持ち、彼の妻も黒人でありながら完璧な白人英語を話す²⁷。白人の生徒たちは Mr. Jenkins を敬う態度を見せることによって、自身の寛容さを誇示しているようである。もう一人の若い黒人美術教師 Mr. Sherman は、「gentlemanly」²⁸な Mr. Jenkins とは対照的に、「janitor」²⁹と見まごう風貌をした「新しい世代の黒人」³⁰で、「黒人英語を改めず、自分の貧しい生立ちをかえって誇示する」³¹ような若者だった。Mr. Sherman や、ゲストスピーカーとして学校に招かれた黒人運動家から、「有色人種」の一員として同一視された美苗は、「ふいに自分に災難がふりかかってきたよう」³²な衝撃を受け、「不愉快と混迷の中に漂」³³う。美苗自身もアクセントのある英語で堂々と自己主張をし、「白人」から一方的に割り当てられたのではない<場所>を勝ち取る戦いをしかけることもできたであろうが、強制的に植えつけられた人種的劣等感と、その裏に張り付いた日本人としての自尊心で身動きが取れず、美苗は英語を話すことで異議申し立てをすることができない。美苗の感じる憤りは、「アメリカ人から見て自分がまずは東洋人でしかないことを知らされた居心地の悪さ」³⁴である。美苗にとって、東洋人であること自体が驚きなのではない。先述したように、自分が東洋人であるということを西洋人から知らしめられ、優劣をとまなうカテゴリー分けに抗議することも出来ずに、他の「有色人種」と当然のごとく同一項に括られてしまうことが、美苗にとっての「驚き」であり「屈辱」なのである。

アメリカ生活に慣れるにしたがってはつきりと意識するようになった「溝」³⁵。

『文学部論叢』91 (2006): 103 頁

²⁶ 水村 218 頁

²⁷ 同上

²⁸ 同 219 頁

²⁹ 同 215 頁

³⁰ 同上

³¹ 同上

³² 同 222 頁

³³ 同 223 頁

³⁴ 同 210 頁

³⁵ 同 162 頁

それはアメリカ社会と美苗との間にあるのではなく、英語と日本語の言語間に決然と存在する溝であった。

気がついたとき私はすでにアメリカの中に生きていた。アメリカの中に日常的な居場所があった。ひと握りだけだとはいえ、その中で **Minae** と呼ばれる人間関係もあった。だからその溝は私とアメリカとの溝ではなかったのである。それは私と「アメリカの私」との間の溝、あるいは、「日本の私」と「アメリカの私」との間の溝だというべきか、いや、正確には「日本語の中の私」と「英語の中の私」との間の溝というべきかもしれない。なぜなら私はアメリカに来ることによって「日本の私」を失ってしまったわけではなく、アメリカに来てからも「日本の私」は私が日本語を使うかぎりにおいてはいきいきと生き続けたからである。そして、「日本語の中の私」こそを真の自分の姿だと考え、日本にさえ帰ればその真の自分を回復できるという思いを抱きながら生きていったのは、「英語の中の私」が私にとってとても自分だとは思えない何物かだったからである。³⁶

美苗は両親の憧れの国アメリカに来ることによって「たしかに上昇した」が、「もう一方で激しく転落した」³⁷のであった。

あたしはたしか恵まれたお嬢さんだったはずじゃない。そう、なにしろ親がハイカラで誇らしいくらいだったし、母は綺麗な着物を着て、美人で、背が高くって、父は—そりゃあ父はハンサムとは言えなかったけど、英語ができて、教養があって、その父のアメリカみやげなんかは近所の羨望の的で、あたしは青い眼をしたお人形さんをたくさんもっていて、それになにしろ頭も性格も良い器量良しのお友達がたくさんいて、(略) それに、それに、なんて言ったって、あたしはこうしてアメリカまで来たじゃないのっ!³⁸

近所の誰もが羨む夢の国アメリカにもっとも近い場所にいることで、他の日本人に優越感を抱いていた美苗が、現実のアメリカのまばゆい光の中に入ったときに、自分は単なる黒い影でしかなかったことに気づかされ、衝撃を受けるのである。

³⁶ 同 163 頁

³⁷ 同上

³⁸ 同上

4. 美苗の「怒り」

美苗の「怒り」の矛先はこのようにアンビヴァレントな自分自身と、自分をそのような認識をもつに迫りやっただ「白人」イデオロギー、そして美苗の分身奈苗を受け入れなかった「正真正銘の日本人」³⁹へと向かう。アメリカ暮らしが長く続くうちにいつのまにやら「亜熱帯の得体の知れない国からの訪問者のような」⁴⁰「国籍不明な派手な外観」⁴¹をもつに至った奈苗は、アメリカのビジネス・スクールでMBA取得のために留学していた「正真正銘の日本人」⁴²の男と懇意になり婚約するが、相手の両親の反対で破談になり、日本で自殺未遂を起こすのである。

「有色人種」という劣位のカテゴリーにむりやり押しこめられたことに対する憤り。そしていつかは日本に帰り、日本人の妻になるのだからと、英語を話すことを熱心に教育してこなかったのんきな両親への不満。さらには「白人」文化を崇拜し、それを卑屈に内面化し、自分が蔑まれていることに気づかないふりをして「白人」中心の近代文明に追随し続ける日本人全体に対しての怒り。それらに対する異議申し立てのために『私小説』は書かれたのだといえよう。

5. 日本語で書かれた『私小説』

美苗は学校では劣等生クラスに入れられたが、家に帰れば雅やかな日本文学を読み漁る少女であった。人種の違いが視覚において明らかになるので、美苗は人種が明らかにならない書き言葉の世界に逃避する。美苗は英語でも作文の授業では優等生クラスへの参加を許可されるのだが、英語で書くことに情熱が向かわないのは先述の通りである。美苗は「精神が日本語の世界に救いを求めており」⁴³、「漢字が私の精神の一部であり、また私自身が漢字の精神の一部でもあるのを発見」⁴⁴する。

ここで文章を書くことによる美苗のエージェンシー構築について考えたい。日本で子どものころから習い事をしてきた美苗であるが、アメリカで人種の問題に直面してからは、バレエとピアノのレッスンをやめてしまう。バレエとピアノはどちらも演者の姿がはっきり視覚に映る芸術である。またどちらも西洋由来の芸術でもある。美苗は日本人として、みっともない模倣者扱いされるこ

³⁹ 同 126 頁

⁴⁰ 同 50 頁

⁴¹ 同 124 頁

⁴² 同 126 頁

⁴³ 同 109 頁

⁴⁴ 同 286 頁

とに耐えられないのである⁴⁵。他方、作者の姿を晒すことなく作品の真価で評価される芸術—すなわち文筆—に美苗は自己実現の可能性をみる⁴⁶。美苗は視覚によって判断されることに強迫観念を抱いているのであるが、同時に日本語の<文字>という視覚表象に救いを求めていることが興味深い。

美苗のエージェンシー構築に奈苗が果たす役割も軽視できない。日本語で小説を書きたいと美苗が宣言する相手は奈苗であり⁴⁷、美苗の混沌とした思いを分節化することに寄与し、美苗が最終的に日本に移り住むことを決意するのも、奈苗との度重なる電話での会話が弁証法的に作用していると考えられる。

さて小説を書くことを決意した美苗であるが、当初はその内容について逡巡する。友人の Sarah がすすめるような「アメリカのフェミニスト好み」⁴⁸の作品は書きたくない。Sarah によれば、“You’re Japanese. You’re a woman. You’re perfect. You have all the necessary attributes”⁴⁹—エスニック・マイノリティであり、女性であれば、アメリカで小説を書くのに必要な条件がすべて整っている—というわけである。祖母・母・娘の三代にわたる女の苦難の歴史を語り、東洋の因襲に縛られた祖母、敗戦後アメリカ占領軍によって解放された母、そしてアメリカでいよいよ自由を謳歌する娘の物語を書けば、アメリカではきつとうけるだろう。しかも英語で作品を発表することは「世界中の言語に翻訳されるということであり、それ以前に、そのまま世界中の人に読まれるということ」⁵⁰である。英語の覇権を意識しながらも美苗は Sarah の提案を受け入れることができない。美苗は日本に帰り日本語で日本人に向けた小説を書いて勝負することを決意する。それは美苗の劣等感の払拭のためでもあるが、より正確には日本人によって隠蔽され続けた屈辱感、すなわち「選択された無知」⁵¹と真摯に向き合うことが根底にある。そこで採用されたのが<私小説>というジャンルである。

6. <私小説>の選択

水村はアメリカで認識せざるを得なかった人種の問題を単なる個人的問題に収斂せず、明治時代以来の日本人全体にかかわる問題として告発しようと考えた。作家の卑近な日常を語る<私小説>というジャンルを用いて、それをどのように

⁴⁵ 鹿鳴館での舞踏会をピエール・ロティに「卑しい物真似」、「なんて醜いんだろう、この哀れな小さな日本の女たちは！」と嘲笑われたことが記述されている。同 277 頁

⁴⁶ 近代イギリスの女性作家たちが男性のペンネームで作品を多数発表したことも関連づけて考えられる。

⁴⁷ 同 94 頁

⁴⁸ 同 316 頁

⁴⁹ 同上

⁵⁰ 同 315 頁

⁵¹ 同 278 頁

可能にするか。以下の文章から美苗が問題視する「おめでたい」<私小説>の姿が浮かび上がる。

漢字とひらがなとその間に散りばめられたカタカナとで縦にうねうねくねくねと書かれた日本語の文章の中に日本語の世界も英語の世界もとけあい、両者の間に亀裂どころか継ぎ目もないようなそんなおめでたい小説—しかも、その男がその男である以前に日本人あるいは東洋人あるいは黄色人種でしかないというアメリカの現実を無視し、あたかもその男がアメリカの中でまず一個の人間として存在しているような、そんなおめでたい小説をどうやって書けるのだろう。⁵²

ここで美苗が主人公を「男」と想定していることに注目したい。日本の<私小説>の伝統を意識していることが明示されている。そしてここには不可避にジェンダーの問題が介入する。『私小説』に登場する日本人留学生は、そのほとんどが日本の官公庁や一流企業から派遣されアメリカ東部の名門大学で学ぶエリート男性なのだが、その英語たるや惨憺たるもので「アイ・アム・ソーリー・マイ・イングリッシュ・イズ・ソー・プアー」⁵³とあえてカタカナ表記されている。つまり音としては英語と認識されないわけである。奈苗いわく「モロジャパ」⁵⁴であるのにアメリカかぶれで、修了後は帰国が決まっているため「東の間の解放感を謳歌するため」⁵⁵にラフな格好を好み、そろって口ひげやあごひげを生やしたりする。とりわけ「彼らのうちのおめでたい」⁵⁶者は自分のことを Ivy Leaguer だと思い込んでいる。美苗によれば「Ivy Leaguer とはふつう Ivy League の大学の学部を卒業した人間を指す」⁵⁷はずなのに、である。実際に美苗の友人の日系人 Makoto はその意味では「正統的な Ivy Leaguer」⁵⁸なのだが、「有色人種」として長いこと Ivy League から締め出されてきた自分の親世代を思うとき、複雑な感を抱き、「おめでたい」日本人留学生のように無邪気にみずからを Ivy Leaguer だとは名乗れないのである。「The Japanese are incredibly naïve」⁵⁹と Makoto が嗤う所以である。吉原真里がいみじくも指摘するように、『私小説』に登場する日本人女性たちは「音楽・美術・文学といった西洋文化の中で自由に泳

⁵² 同 143 頁

⁵³ 同 68-9 頁

⁵⁴ 同 283 頁

⁵⁵ 同 265 頁

⁵⁶ 同上

⁵⁷ 同上

⁵⁸ 同上

⁵⁹ 同上

ぎ、「男性陣よりずっとコスモポリタンな存在に見える」のだが、「女性たちが越境によって身につける西洋文化、そして英語という言葉は、特権的文化資本として彼女たちを世界で通用させるどころか、彼女たちの人種・国家・文化・ジェンダーによって規定されたアイデンティティをむしろ前面に押し出し、彼女たちを文化的宙吊り状態におく」⁶⁰。女性たちとは対照的に、日本人男性たちは「越境することで社会的な付加価値を身につけながらも、その意識のありかたはきわめて定点的である（ように見える）。そして、彼らはおしなべて悲劇的に英語が下手であるにもかかわらず、いやおそらくそれが故に、アメリカでも美苗が語るようなアイデンティティ・クライシスを経験することがない（ように見える）」⁶¹のである。

美苗の心の中の抑えようもない「鈍い怒り」⁶²は「おめでたい男」すなわち日本の知識人男性たちに向けられている。美苗は先述したように『私小説』が<女の問題>として限定されることを拒絶し、文明開化以来日本人、なかでも知識人男性が不問に付してきた「選択された無知」の核心に迫るのである。しかしそこにはジェンダーの問題が不可避的に介入する。なぜなら日本人エリート男性はへらへらとした笑みを浮かべてさっさと帰国しても帰国後の地位は安泰であるが、美苗と奈苗はアメリカに留まって人種の問題に苦悩せざるを得ず、また日本に帰国したらしたで「正真正銘の日本人」たちからあたかも異邦人のような扱いを受けてしまうからだ。美苗は「自分の足で立って生きることの疲れ」⁶³を憂え、「何も考えないでよかったころを恋」⁶⁴う。そしてそれを「退行現象」と命名することによって「自分の精神の疲労を受け入れ、受け入れることによって光の射す方へ這い上がろうとする」⁶⁵。これが男性作家だったらこの状態を「母胎回帰」⁶⁶と命名するだろうか、と皮肉まじりにつぶやきつつ。男性知識人が人種の問題を「選択的」に「無視」することができたのは、彼らが日本に帰りさえすればそこで自分の優越性を振るうことができ、屈辱をなかったことにし、自尊心を回復することができたからにほかならない。

水村はアメリカ生活で植えつけられた劣等感を自分個人の問題ととらえず、近代以降の日本人全体の問題として提示し、真摯に向き合うことをうながすのだが、それは主人公を女性に設定し、彼女を文化的宙吊りに置くことで可能になった。長く隠蔽された問題を自分の言葉で掘り起こし、根本から見つめ直そ

⁶⁰ 吉原 95 頁

⁶¹ 同上

⁶² 水村 143 頁

⁶³ 同 378 頁

⁶⁴ 同上

⁶⁵ 同上

⁶⁶ 同上

うという姿勢は、同じく滞米経験のある女性作家赤坂真理の『東京プリズン』（2012年）にも看取できる。

打ち砕かれた自尊心は、「白人」崇拜とその裏面にはりついた日本人としての劣等感を自分が知らぬうちに内面化してしまったことに原因があることに、美苗はアメリカ生活を経て気がつく。いや正確にはアメリカの大学でアメリカ人によって指摘される。『舞姫』以来綿々つつづく「wishful thinkingの歴史」⁶⁷を白日の下にさらさなければならぬ。注意したいのは、ここで問題になっている日本人の醜さや卑屈さはあくまでも「白人」の目から見た美醜観を基準としていることだ。他者の基準で一方向的に評価されながら、その同じ相手から蔑まされていることに気づかぬふりをして、自己肯定をする日本人に対して『私小説』は警告を発するのである。水村は、森鷗外から三島由紀夫に連なる「日本語を駆使して日本語の中に西洋の世界を現す伝統—擬古文の雅を駆使しての伝統」⁶⁸に倣い、伝統の中心にもぐりこんで「wishful thinkingの歴史」をつまびらかにするという離れ業、いうならば<私小説>の脱構築を成し遂げたのである。

吉原は「アメリカの人種関係や日米間の権力関係は、美苗にとって「選択された無知」ならぬ「余儀なくされた認識」とでもいうべきものであった」と論及する⁶⁹。「本当の意味で」アメリカに溶け込めないのは、自分たちが「白人」ではないからだと呼ぶ奈苗の悲痛な声が美苗の心に響く⁷⁰。それまで奈苗も美苗も日本語で「白人」という言葉を発したことがなかったのだが、奈苗のこの発言を機に、あたかも封印が溶けたかのように「白人」という言葉が姉妹の口からあふれ出る。これはいままで一方向的に「有色人種」と名指されてきた美苗と奈苗による<名指し返し>の行為ということができよう。奈苗が分節化することによって美苗の鬱屈した思いが顕在化する。奈苗とダイアログを交わすことによって、それまで形をなさなかった美苗の「鈍い怒り」がはっきりとした輪郭を持って顕在化するのである。奈苗との会話を契機に、美苗は本格的に日本に帰って小説を書くことを決意する。「選択された無知」を中心に温存し続けた日本近代文学に一矢を報いるつもりで。

以上みてきたように、日本人知識人による意図的な記憶の隠蔽がアメリカ人によって指摘されるという衝撃と屈辱（赤坂真理の場合も同様）を告発するのに最もふさわしいジャンルが<私小説>だったというわけである。『私小説』は「正真正銘の日本人」⁷¹につきつけた美苗の告発状だといえよう。

⁶⁷ 同 278 頁

⁶⁸ 同 276-7 頁

⁶⁹ 吉原 100 頁

⁷⁰ 水村 249 頁

⁷¹ 同 126 頁

7. 複数言語の混交文体

先行研究では『私小説』の複数言語混交文体を特別視する言及が多い。Iguchi Atsushi は、水村自身が習得に努力を要した英語であるのに、英語と日本語の混交文体を選択したことによって、英語を読むことができない大方の日本人を读者から排除したことを重要視する⁷²。Iguchi は、英語を理解しない読者をあえて排除してまで英語と日本語の混交文体を選んだことに水村の特別な意図をみようとするのである⁷³。いっぽう青柳悦子は「(アメリカ社会、英語、日本語、日本文学、日本社会などのいずれにたいしても) エイリアンとネイティヴが入り混じった不透明な—つまりは「得体の知れない」—存在となしてきたことを、ハイブリッドな形式で表出した作品である」⁷⁴と評価したうえで、『私小説』の特異性は日本語と英語の混在にあるのではなく、日常言語、書記言語、文学言語、内面言語が入り混じっているところにあると論じる⁷⁵。また高木徹も日本語と英語の混在は「アメリカでの「私」の言語生活が日本語と英語の両方から成り立っており、どちらも欠かすことのできないものであるからだろう」⁷⁶と言及するが、こちらも正しい指摘といえるだろう。

本稿筆者は日本語と英語の混交文体をことさら特別視しない。多言語混交文体はアメリカに長く暮らす人間にとって普通の、ごく日常的な営為である。姉妹の会話をリアルに再現すれば、マルチリンガルになるのは当たり前である。むしろマルチリンガルな文学が『私小説』発表時それほどまでに日本でセンセーショナルに受け取られたことに驚きを感じる。『私小説』と同時期にアメリカで発表されたエスニック・マイノリティの作品は、複数言語が混交するものが多い。また日本文学における日本語と英語の混交文体でいえば、すでに1920年代に谷譲次が一連の「めりけんじゃっふ」もので日本語と英語を混ぜた作品を発表し、大いに人気を博した。しかもそれは一部の限られたインテリ読者向けではなく大衆文学の分野においてである。

『私小説』は豊富な言語資源の活用や多彩な表記によって、重層的な効果を生み出すことに成功した。高木は「日本語と英語を軸にしながら、英語ではイタリック体やカタカナの表記も使い、日本語に関しては、旧字や旧仮名遣いを

⁷² Iguchi, Atsushi. "Homecoming, Exile and Bilingualism—Minae Mizumura's *I-Novel from Left to Right*—" *Journal of The Open University of Japan*. 29 (2011): 65.

⁷³ 水村自身、主に英語と日本語からなる小説を書いた意図として、英語への翻訳不可能性を語っているが、この件に関して筆者は翻訳論と読者論の視座から水村とは異なった考えを持っている。英語で書かれたテキストの英語への「翻訳不可能性」については、稿を改めて論じたい。

⁷⁴ 青柳 18 頁

⁷⁵ 同 18-9 頁

⁷⁶ 高木徹「水村美苗『私小説 from left to right』を読む」『CUWC gazette』9 (1998): 5

巧みに織り混ぜ、さらに時として文語文も用い、多層化した言語空間をつくり出している」とし、それは同時に美苗の「重層化した言語生活の反映でもある」⁷⁷と指摘するが、まさにその通りであろう。

さらに表記に関して高木は興味深い指摘をしている。『私小説』で、日系二世の話し言葉が旧仮名遣いで表記されていることに注目し、その理由として海外の日系人は「日本の変化から切り離されているだけに、かえって日本文化の古い部分を残している場合もあり」、「二世の奥さんの言葉を旧仮名遣いで書くことで、彼女の古めかしさを表現している」⁷⁸と論じている⁷⁹。じっさい本稿筆者の知人であるアメリカ在住日系人女性（多くは二世、なかには一世の人もいる）は、1990年代に入っても日本語の文字を書く時は旧仮名遣いを使用していた⁸⁰。

以上の理由から水村が日本語と英語、そして若干のフランス語を混交するのはプラクティカルな理由が大きな比重を占めるものと考えられる。さまざまな言語を混交し種々の表記を用いることによって、単一の言語を使用した文体では得られない豊かな表現が創出されたといえよう。言葉が人間を創り、言葉が世界を創るのだと美苗は語るが⁸¹、サピア・ウォーフ仮説をもち出すまでもなく、英語・日本語・フランス語を駆使する水村は⁸²、異なる三つの世界を手に入れたことになる。

表記に関して高木はもう一点興味深い指摘をしている。『私小説』において人名や地名、植物の名前などの固有名詞が、あるときは英語表記、またあるときは日本語表記になっていることに注目し、その理由を、美苗がアメリカで習得した言葉はアルファベットで表記し、日本ですでに知っていた言葉（たとえばゲーリー・クーパーなど）はカタカナ書きになっていると推察する。この件に関して高木は「最初から英語として「私」の中に入ってきた言葉は英語でしか書き表せないということだろう」⁸³と論じている。本稿筆者もおおむね同意見であるが、植物の名前に関して高木の考えに若干補足したい。ロングアイランドにある美苗の家の庭には、さまざまな花が咲き乱れている⁸⁴。そのなかで本文中英語表記になっているのは、maple tree, dogwood, azalea, alyssum の四種、日本

⁷⁷ 同 8 頁

⁷⁸ 同上

⁷⁹ 柳田國男の蝸牛考が詳しい。

⁸⁰ 1990年代初め。カリフォルニア州ワトソンヴィル (Watsonville) 周辺の日系人女性たち。1991年から1995年まで筆者は当地の仏教会で日系人女性たちに生け花を習い、たいへんお世話になった経験がある。

⁸¹ 水村 325 頁

⁸² 美苗はそのほか中国語を勉強したとも書かれている。

⁸³ 高木 6-7 頁

⁸⁴ 水村 46 頁

語表記になっているのは、百合、八重桜、すみれ、クロッカス、ヒヤシンス、チューリップである。十二歳でアメリカに渡った美苗であるから、alyssum（アリッサム）や dogwood（ハナミズキ）はアメリカで初めて目にしたのかもしれないが、楓（maple tree）やツツジ（azalea）は既知であったに違いない。ではなぜ英語表記になっているのか。私見ではアメリカの maple tree や azalea は日本の楓やツツジとは別種のように美苗の目に映ったのだと考える。じっさい上記二種以外でもアジサイやギボウシなど日本ではおなじみの植物も、アメリカでは花姿がずいぶん違う。そのような植物を水村はあえて英語表記にしたのだと思われる。ここでも視覚と言語の密接な関係がうかがわれ、作家の言語表記に対する細やかな配慮が看取できる。

おわりに

以上、『私小説』創出に水村が<私小説>というジャンルを選択したことの狙いと効果を、エージェンシーの構築に大きく影響する言語と人種イデオロギーという相関する問題系の枠組みの中で論じた。<私小説>という自伝にもっとも近い小説ジャンルを選択したときに、美苗の内面をリアルに再現するのに必然的に要請されたスタイルが、複数言語の混交文体だったといえよう。これは<私小説>を書く際にマルチリンガルな作家が自然に選ぶ文体であろう。結果的に作品には単一の言語を用いたのでは得られない文化的多層性が加わることになった。また複数言語の多様な表記、さらには写真という視覚表象を日本語主体の小説のなかに境界なく溶け込ませることが可能であることを『私小説』は実証した。これは美苗のエージェンシーがこれらの言語・視覚表象の豊かな複合体であることを示している。このように逆説的なジャンルの選択と豊富な言語資源の活用によって、近代以降日本人が直面することを回避してきた人種の問題をジェンダーの問題と関連づけて深く切り結んだのが『私小説』であるといえよう。

但馬 みほ (TAJIMA, Miho) : 城西国際大学大学院人文科学研究科比較文化専攻。比較ジェンダー論博士後期課程アメリカカリフォルニア大学バークレー校で東アジア言語文化学 (East Asian Languages and Cultures) とアジア研究学 (Asian Studies) を複数専攻 (double major) で卒業後、城西国際大学大学院で修士号を取得 (女性学専攻)。現在は同大学大学院比較文化専攻 博士後期課程在籍中。専門は日本文学、ジェンダー批評、翻訳論。

【註】

本稿は2015年2月10日城西国際大学において開催された The Second Visegrad 4 Plus Japan Student Conference にて筆者が発表した “The Role of Location in the Construction of Identity: A Comparison between Mizumura Minae's *Shishosetsu from left to right* and Fae Myenne Ng's *Bone*”を基に、水村美苗作品に論点を絞って再考した研究ノートである。

【引用文献】

青柳悦子「複数性と文学—移植型<境界児>リービ英雄と水村美苗に見る文学の渴望」『言語文化論集』56 (2001): 1-29. Web. 2015年3月11日

高木徹「水村美苗『私小説 from left to right』を読む」『CUWC gazette』9 (1998): 111-120. Web. 2015年3月11日

水村美苗『私小説 from left to right』新潮社 1995年 Print

溝渕園子「水村美苗『私小説 from left to right』試論：異言語混交文の必然性をめぐって」『文学部論叢』91 (2006): 93-110. Web. 2015年3月11日

吉原真里「Home Is Where the Tongue Is:—リービ英雄と水村美苗の越境と言語—」『アメリカ研究』34 (2000): 87-104. Web. 2015年3月11日

Iguchi, Atsushi. “Homecoming, Exile and Bilingualism—Minae Mizumura’s *I-Novel from Left to Right*—” *Journal of The Open University of Japan*. 29 (2011): 63-68. Web. 11 March, 2015.

Ng, Fae Myenne. *Bone*. New York: HarperCollins, 1993. Print.